

2025年1月15日 スポジンサロン発表抄録

**現代中国の綱引き遊戯
崔 樂泉（鄭州大学体育学院）**

古いスポーツとして、中国の綱引きに関する最初の記述は春秋戦国時代の楚国に登場した。時代の発展と文化の伝播に伴い、綱引き遊戯は内包的にも形式的にも変化した。本研究では、中国の各地域でフィールドワークを行うことにより、民間遊戯としての綱引きが中国で異なるタイプと状況をまとめる。また、現代中国の異なる少数民族が行っている綱引き遊戯についても調査を行った。そこから民族スポーツ文化が伝承過程において中華民族の凝集力の向上と文化アイデンティティの建設に果たす役割を探求する。

**中国の「スポーツ人類学」、その呼称の由来を考える
楊 長明（吉林大学体育学院）**

中国の「スポーツ人類学」研究の始まりは1980年代にさかのぼることができ、40年近くの発展を経て、すでに比較的完備した学科体系と研究方法が形成され、国際学術界と交流を維持している。本研究では、中国の「スポーツ人類学」の呼称の由来を通じて、中国のスポーツ人類学の起源と発展及び「スポーツ人類学」という呼称の合理性を検討する。中国のスポーツ人類学の発展は3つの重要な段階を経験した：(1) 80年代の学科形成段階、(2) 90年代の学科設立段階、(3) 21世紀以来の学科発展段階。中国のスポーツ人類学は日本のスポーツ人類学とは異なり、まず呼称の定義について検討する余地があり、本研究では、これを背景に問題を提起し、考えてみたい。

**動物スポーツの現在地
小木曾 航平（九州大学）**

スポーツ人類学は動物スポーツを積極的に扱う数少ない学問分野の一つであろう。そして、現在もなお動物スポーツを嗜む民族や社会は少なくない。では、こうした動物スポーツ研究は21世紀に入ってどれほど進展してきただろうか。スポーツ研究の外に目を向けてみると、アクターネットワーク理論、人新世、ポストヒューマニズム、マルチスピーシーズ民族誌など、人間と非人間の関係に再考を迫るいくつもの理論的試みが今世紀に入って噴出している。これらの新しい潮流は動物スポーツ研究に対して、どんな刺激をもたらすのだろうか。本発表では特に21世紀以降の人類学の研究動向を概観しながら、動物スポーツの現在地とこれから可能性について検討してみたい。